

歳の男性。両親はいとこ婚。26歳の時精上皮腫のため睾丸摘除術を受けたが、この数年前から足底に難治性の丘疹が出現した。口腔内にも小丘疹が多発し、全消化管にポリポーシスを認めたため Cowden 病と診断した。尚、どちらの症例も染色体に異常は認められなかった。

2) Cronkhite-Canada 症候群の1例

松木 淳・大矢 洋
伊賀 芳朗・村山 裕一 (村上総合病院 外科)
清水 春夫

今回我々は Cronkhite-Canada 症候群を経験し8年間に渡る経過観察を行ったのでここに報告する。

Cronkhite-Canada 症候群の予後はこれまで不良とされ、Clinical malignancy とされてきた。しかし最近の報告例の調査では軽快例が増加してきており、経過観察中に自覚症状が改善し、毛髪の再生、爪の発育も見られ、X線および内視鏡検査によりポリープの減少ないし消失のみられた症例もかなり報告されている。本症例は、ステロイド剤、アルブミン製剤、輸液等により一旦症状改善したが、ステロイド剤の中止により再燃、再びステロイド剤開始し長期のステロイド維持療法を行ったものである。約6年間のステロイド治療後内服中止し2年間経過しているが経過は良好である。再発の原因については、種々の要因が考えられるが、ステロイドの中止も一因と思われ、中止時期についての検討が重要ともわれる。

3) ステロイド療法に抵抗した Cronkhite-Canada 症候群の一部検討

中村 厚夫・本間 照
鈴木 恒治・吉田 研
杉村 一仁・成澤林太郎 (新潟大学 第三内科)
朝倉 均 (同 第一病理)
西倉 健 (水原郷病院 内科)
若杉 裕

4) 当科における大腸腺腫症手術症例の検討

谷 達夫・酒井 靖夫
須田 武保・早見 守仁
丸山 聡・桑原 明史
多々 孝・小出 則彦
斉藤 義之・佐々木正貴
丸田 智章・山崎 俊幸
斉藤 英俊・三間智恵子
瀧井 康公・岡本 春彦 (新潟大学 第一外科)
畠山 勝義

<目的>大腸腺腫症手術症例の術式、病理学的所見、大腸外病変、予後について特徴を明らかにし、治療方針を検討する。

<対象>1961年から1996年5月までに、当科で経験した16例。

<結果>一期的手術13例。当科では1992年より結腸全摘・直腸粘膜剥去・W型回腸嚢を用いた回腸肛門吻合術を標準術式としており、二期的手術3例。病理学的所見は非密生型13例、密生型3例。sm以深癌合併率8例、25-63(45)歳。大腸外病変は胃腺腫2例、胃ポリープ5例、十二指腸腺腫2例、乳頭部腺腫4例。網膜色素上皮異常1例、顎骨内骨病変5例。術後アスモイド腫瘍発生1例。十年生存率は、90%、癌合併例83%、非癌合併例100%。

<結語>1. 25歳以前に根治手術を行うべきと思われる。2. 当科標準術式は本症患者に対する標準術式として妥当と思われる。3. 大腸外病変の経過観察、家族歴の経時的聴取を確実にを行うことが重要である。

5) 大腸ポリープ切除例の検討

山本 智・筒井 光広
牧野 春彦・土屋 嘉昭
梨本 篤・田中 乙雄 (県立がんセンター)
佐野 宗明・佐々木壽英 (新潟病院 外科)

6) 当科の大腸ポリープ手術例

山本 陸生・片柳 憲雄
斎藤 英樹・桑山 哲治 (新潟市民病院)
藍沢 修・丸田 宥吉 (外科)

過去10年間の大腸腺腫症手術例は6例で、男性5例、女性1例でした。初回手術年齢は平均41.3歳、全例に大腸癌の家族歴はありません。進行癌合併症例が3例、腺腫内癌合併症例が3例でした。経過、術式に問題のあった2例を提示します。第1例は全大腸密集型で、青年期に結腸全摘術が施行され経過観察を行っていました。25